

天理市前裁町

九ノ坪・シマダ遺跡

発掘調査概報

1983

天 理 市
天理市教育委員会

序 文

天理市都市計画街路については、昭和29年計画決定されました。その後昭和36年、45年に一部の計画変更があり、都市計画道路は、骨格的な道路の優先整備を目標に、広域道路、都市内幹線道路などの整備が着々と進められています。

北大路線も都市内幹線道路として整備され、昭和57年度工事予定地域内に、前牧町字九ノ坪・シマダ遺跡と条里界があるため、工事施行に先立ち、全域を試掘調査し、このうち遺構の集中する2ヵ所 960m²を本調査しました。

調査の結果、古墳時代の玉作遺跡と思われる貴重な遺物のかずかずを発見しました。玉作工房跡を示す直接の手掛りこそつかめなかったものの、県内における数少ない玉作関係遺跡の存在が判明したことは、まことに意義深いことです。

調査に当たって、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、天理大学附属天理参考館等の積極的なご助言とご協力を賜わり深く感謝の意を表します。

昭和58年3月

天理市教育委員会

教育長 中野康治

例　　言

1. 本概報は、天理市教育委員会が実施した、前牧町における都市計画道路の建設に先立つ発掘調査の概要である。
2. 調査は、昭和57年11月11日に開始し、同年12月28日に現地調査を終了した。現地調査は、市教育委員会社会教育課・泉　武が担当した。
調査の補助として、木田繁子・梅野雅昭・山村浩子・谷脇俊憲の各氏が参加した。また、担当事業課である都市計画課担当者には協力をいただいた。記して謝意を表します。
3. 本書の編集は泉　武が行い、図面作成は、山村浩子氏が原図作成にあたった。
4. 河道はSD、土塗SK、おちはSXで略称した。

目　　次

| | |
|----------------------|----|
| 1. 調査の契機と経過..... | 2 |
| 2. 遺跡の位置と環境..... | 2 |
| 3. 調査の概要..... | 3 |
| 4. 1区の調査..... | 5 |
| 5. 2区の調査..... | 9 |
| 6. 3区の調査..... | 11 |
| 7. 出土遺物..... | 11 |
| 8. まとめ..... | 12 |
| 付載 岩石鑑定表(奥田　尚) | 12 |



図1 57年度発掘調査位置

1. 調査の契機と経過

昭和57年、天理市建設部都市計画課より、都市計画道路「北大路線」の延長工事計画と、遺跡の踏査立願が提出された。そこで『奈良県遺跡地図』、『大和国条里復原図』など文献調査を行ったところ、当該地は、条里界の存在（山辺郡八条四里）と、遺物散布地として周知の遺跡であることが判明した。また都市計画道路は、天理市域を縦横に設置され、このことにより、未確認の遺跡が出現することは十分に想された。このため今後の調査の全般的な検討を含めて都市計画課と発掘調査の手順を打ち合せた。そして当調査では、予定線内の全域にわたって試掘調査を行い、その結果を踏まえて調査地域を決定することとなった。

調査は昭和57年11月11日より、東西約220mの道路予定地を幅4mで試掘し、遺構の有無の確認を行った。その結果、東端より40m地点、中央付近、条里界線より東へ約20mの地点において河道跡、土壌などが検出された。

そして、これらの地点を対象として道路幅（約16m）で拡張することになった。しかし中央部については、排土の関係もあって拡張できず、また西側についても、生活道路として使用されているため拡張できなかった。

本調査は、東側を1区とし、西側を2区とした。

1区は、東西約43m×南北約14mの約600m²、2区は、東西約26m×南北約14mで約360m²の調査範囲となった。

2. 遺跡の位置と環境（図2）

調査地は、前森町字九ノ坪、シマダ、アラケ、コマノクチの地名を残す水田地帯となっている。前森町の北約200mの地点にあり、東にはツクダ池、五大池という大きな、かんがい用ため池が造られている。現地表の標高は東端で57.22m、西端で55.86mで1.36mの標高差があり、水田1筆につき10cm程度でゆるく西方に傾斜している。遺跡周辺



図2 調査位置（斜線）

にはさほど大きな河川はなく、前森町の北側に布留川の流れがあるだけである。

周辺の遺跡には、前森小学校を中心として大きく広がる前森遺跡と、岩室町の北側に広がる平等坊・岩室遺跡がある。この遺跡は、大正7年佐藤小吉による調査が始まり、以後昭和45年から57年にかけて数次の発掘調査が実施され、弥生時代の大集落が形成されていたことが明らかになりつつある。北では中ツ道周辺と二階堂地域にかけて遺物散布地が点在しており、この地域が、濃密な埋蔵文化財の包蔵地であることがうかがわれる。

また北約1000mには、御墓山古墳が存在している。全長約67mで南北方向に主軸をおいている。周濠も見られ、平地に立地する前方後円墳として注目される。

歴史時代になると、いのわかみ石上寺、あきわかみ在原寺、なまき長寺など奈良時代前期の古代寺院が次々に建立された。鎌文時代の明確な遺跡は、まだ確認されてはいないものの、弥生時代から奈良時代にかけて、集落と生産拠点である水田が、この一帯に営まれたことは想像にかたくない。

3. 調査の概要 (図3, 4, 5)

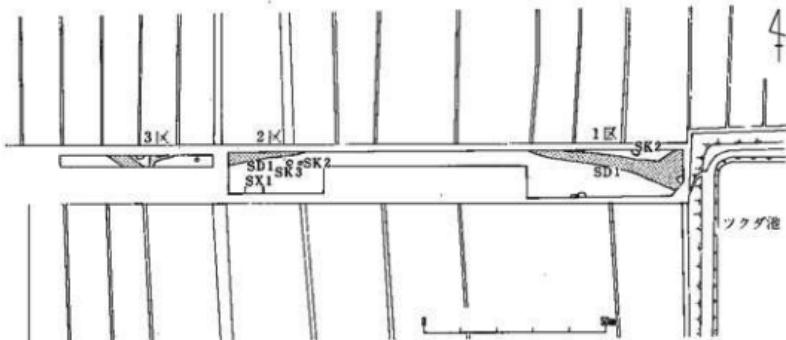


図3 調査区と検出遺構

調査は、前述したように1区において約600m²、2区において約360m²の調査を行った。条里界については、生活道路として使用されていることと、調査期間の関係から断念せざるをえなかった。今後の調査の反省材料としたい。

発掘調査により検出した遺構は、1区においては、河道(SD1)と土壙3、2区においては、1区のSD1の延長とみられる河道南岸と土壙群である。

1区のSD1は東西約40m検出した。河道東端は2方向から流れてきたのが合流して、西流する地点となっていた。そして、河道は大きくは3時期に区分できた。

I期は河幅約2~3mである。II期になると中央部付近で北側に川幅が広がった時期があるようである。そして、この時期にシガラミが3か所に設置されている。

III期は川幅が約5mと広がるもの、流れは20~30cmと極端に浅くなり、このために土砂がオ-



図4 発掘調査全景写真（北より）



図5 調査前状況（東より）

バーフローして広くなったと考えられる。

砂堆積中に奈良時代の須恵器、瓦など少量混じることから、この時期には廃絶したものとみられる。またSX5と呼んできた遺構は、西流した河川のくぼ地に土器や石器、玉など投棄されたものであり、この埋没の時期はSD1全体の埋没時より古い時期である。

2区は、SD1南岸約20m分と、

土壙5か所、SX1を検出した。

河道内では、1区ほど多量の遺物は入っていなかった。土壙は直徑約2mから50cm前後までバラエティーに富み、またSK2、SK3については大量の遺物が出土した。しかも遺物の組合せ、出土状態などを検討すると、投棄穴などではなく特別な用途も考えられる。SX1は3m×2mで深さ約15cm～20cmの方形土壙で、南側へ延びている。また南側の断面には、2、3の土壙がみられ、遺構が南へ広がっていることが確認できた。3区では、試掘調査により小土壙2と溝を検出した。しかしSD1の岸については検出できなかった。北へ少し蛇行するものと考えられる。

4. 1 区 の 調 査 (図6, 7)

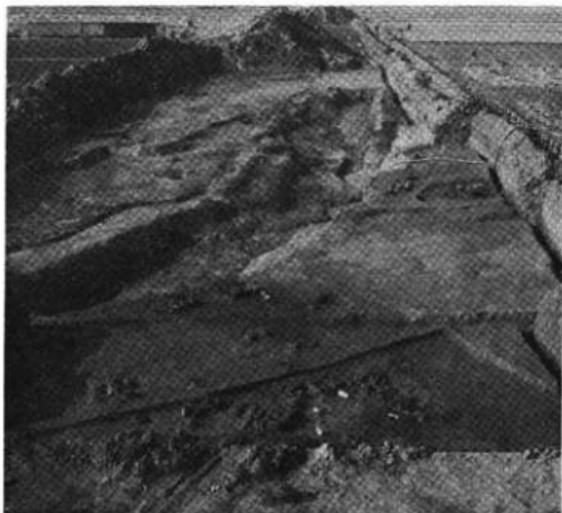


図6 1区河道（東より）

左図は1区の調査のうち河道（SD 1）を掘り終えたところで、東より西方向の展望である。やや蛇行しながら西流している様子がわかる。河道の深さは約1.2mである。北岸右側に土壙2が見えている。また南岸の南側で一段下がっている部分がⅢ期の南岸に当る。なお、手前は、SX 5の一部分で上面を検出している。



図7 1区調査風景

下図はSD 1の調査状況である。河道の中央部にベルトコンベアーアーを設置して作業を開始した。河道であるためか、廃絶しているとはいえ、かなりの湧水があり、2台の水中ポンプを使用した。土器は地区割をして取り上げた。かなり集中する地点があることも明らかになった。左白線は、Ⅲ期の南岸を示している。Ⅲ期は浅く、この線まで土砂がオーバーフローしたことがわかる。



SD 1 西端の埋没状況である。この河道は 3 期に大別できた。Ⅰ期の堆積はⅡ期の流れにより中央部が流出している。またⅢ期は、上面 1 層で左へさらに広がっている。



SD 1 北岸の木杭列である。直徑約 5 ~ 7 cm の自然木と、方形に加工した杭を使用し、流れに対して直角方向に入れている。

Ⅱ期に、この地点より西側で、北岸を大きく削られたために、川岸の補修として設置されたことがうかがえる。このような杭列は他に 2 か所検出した。



左図は、河道内における土器の出土状態を示している。SD 1 よりコンテナで約 100 箱近く出土した。左図のように土師器甕が多くを占めている。体部表面にはヌスの付着が見られ、日常生活に使用していたものを投棄したものであろう。また、Ⅰ層・Ⅱ層は、土師器のみでⅢ層より須恵器が出土している。

図 8 1 区河道検出状況



左図も土器の出土状態である。高杯が2個体である。当遺跡では、高杯もかなり出土したが、完形品は1、2点しかなく、ほとんどが杯部や脚部の欠けた状態であった。これは接合部が最も弱いことによるであろうが、壊れてすてられたとみられる。土器はこの他に小型丸底壺、壺などが出土した。



SD1より木製品もいくつか出土した。左図はSD1のはば中央部で出土した。長方形板に2本の溝をうがっている。長辺75cm、短辺49cmあり、厚みは0.8~1cmである。

2本の溝は、ユ状のいわゆる蟻柄（ありほぞ）の手法を用いており、この溝に板をはめ込んでいたと考えられる。表面については未観察である。机の形状を想像しているが、類例に乏しい木製品である。

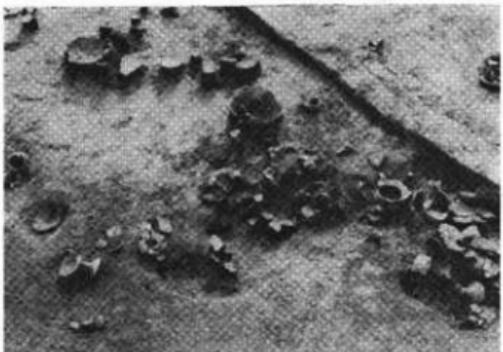


木製農耕具が2点出土した。左図は鋤と考えられる。一本造りで刃先はU字形である。約1mほどで柄部は破損していた。また、刃部と柄部は一直線ではなく少し屈曲している。同一地点より鋤先も出土した。

図9 1区河道内出土遺物



1区では、土壙を南に3か所と北に2か所検出した。左図は土壙2である。北側はトレンチ外となるため全体は検出できなかった。幅約1.6mあり、深さは約50cmである。土壙底より土器と炭化木が出土した。炭化木は四角に加工した材である。この土壙の上面からも土器が、かたまって出土した。



左図はS X 5の土器出土状態である。この遺構は、SD 1が埋まっている途中で、そのくぼ地に乗てられたようである。この中から土器とともに勾玉や管未成品、玉の材料である碧玉、滑石、グリーンタフなどが出土した。



またS X 5より櫛が出土した。これは縦櫛と呼ばれるもので、幅約3.7cmあり、柄部分には黒漆が塗布され、原型を保ち歯も少し残っていた。

図10 1区土壤とS X 5出土遺物

5. 2 区の調査 (図11, 12)



図11 2区遺構検出状況（西より）

2区は、条里界線の東側で約360m²の調査面積であった。

ここより1区のSD1の延長線とみられる河道の南岸を検出した。図では左端に見えている。ほかの遺構としては、土壙5か所とSX1が1か所である。そして南側についても、壁面に2, 3か所土壙を切っているところがあり、当調査区の南へ広がっていることは、明らかである。



土壙2は、直径約1mに満たない。少しいびつな平面形を呈していて、深さは約1.2mである。U字形をしており、土器、木製品が多く出土した。そして、この土壙では自然木の細い枝を土壙のまわりに立てかけた状態で検出された。さらに土壙底には、その中央に土瓶器壺を下に向けて置かれていた。また、木製品、木片などは、ことごとく焼けていた。



土壙3は、直径約1.2mあり、土壙2に比べ、一回り大きい。深さ約1mほどあり、こちらからも土器などが大量に出土した。特に注目されるのは、この土壙より滑石屑石が1個出土したことである。



左図は土壙 2 の土器と木製品の出土状態である。土器は完形品がかなり含まれていた。左図の木製品は長さ12cm、直径約6.5cmの円筒状をしており、四角の穿孔がある。組通しの穴と考えられるが、使用による擦痕が見られない。また表面は焼けた痕跡もみられ、木製錠と考えられる。



左図は土壙 3 の木板と高杯の出土状態である。土壙 2 より一回り大形の土壙であるが、遺物は土壙 2 とよく似ている。加工木は両面ともよく焼けている。自然木も表皮はきれいに取り除かれ、先端部分が焼けていた。しかし、土壙 2、3 とも壁面には火を受けた痕跡はみられなかった。



左図は S X 1 出土の銅鐘の出土状態である。S X 1 は、方形土壙であるが、この埋土中より出土した。長さ約4.7cmあり、鐘の明瞭な、断面菱形を呈している。

図12 2区土壙・S X 1出土遺物

6. 3区の調査 (図13)



図13 3区遺構検出状況

3区の調査は、条里界線より西側の地区である。時間などの制約もあって十分な調査はできなかった。また、2区に隣接しているにもかかわらず、SD1は検出できなかった。北へ蛇行したものと考えられる。

検出した遺構は、土塙2、溝2である。土塙は小規模で、出土遺物は少量の土師器であった。溝は幅約1mのものと、20~30cmのものを検出した。小溝は、大溝の分流とみられる。大溝は、東西方向に少し蛇行している。出土遺物はほとんどなく、時期不明である。溝と界した西側

では、遺構は全くなかった。

7. 出 土 遺 物 (図14)

1区、2区あわせてコンテナで約130箱近く出土した。このうち大半は、SD1から出土したもので、土師器土器類である。まだ未整理のため詳しくは触れられないが、そのうち実測できたものを右図に示した。

1は、高さ約5.5cm、口縁部径約3.3cmあり、二重口縁の小型壺である。口縁部、体部との接合部、体部などに竹管による列点文様と線刻文様を表面全体に施している。内面ではなく、特殊な用途が考えられる。2は、SD1南岸から出土した子持勾玉である。長さ約5.1cm、幅約1.4cmある。背、腹、両側に合計7個の小形勾玉を表現している。3、4は小型丸底壺である。特に3の肩部には、拓本で示した線刻による表現を施した絵画文様がみられる。

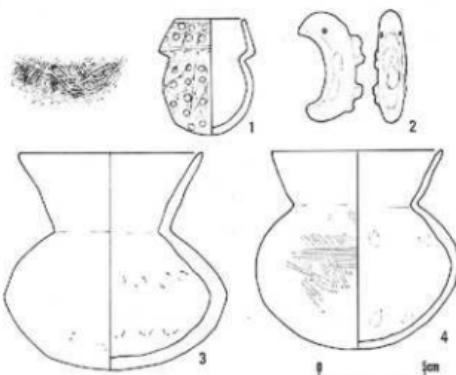


図14 SD1出土遺物

8. ま　と　め

以上が1区、2区の調査の概要である。本概報では詳しく触れられない部分も少なくなかったが、最後に当遺跡の概略をまとめた。

1. 当遺跡は、玉作関係の遺跡であることが判明した。工房等は検出できなかったものの、玉作の原料である碧玉、滑石、グリーンタフなど出土し、また未成品も出土するなど、この調査区に隣接して、これら工房関係遺構の存在することは十分に予想される。

2. 2区の土壇においても滑石が出土したことから、この地区も玉作関係の遺構と考えられる。このことは、1区をあわせて少なくとも東西約200mの広がりを持つ遺跡であることが判明した。

3. 出土遺物では土器のほかに、木製品、玉製品、石製品等多種多様にわたっており、このことは日常生活用品、生産関係用品、祭祀関係用品など、当時の社会生活の具体性を追究する上で欠かせないものとなった。

4. 当遺跡が営まれた時期は、河道と土壇から出土した資料により、古墳時代中期前半を中心としたものと考えられる。

なお、当遺跡の調査に際しては、権原考古学研究所・石野博信研究部部長、泉森 皎調査課課長をはじめ所員の方方より御助言をいただいた。また埋蔵文化財天理教調査団・置田雅昭氏をはじめ団員の方方にも親切なご助言をいただいた。ここに記して謝意を表します。

付載 SD1, SX5出土岩石鑑定一覧表（抄）

（鑑定は、権原考古学研究所所員・奥田 尚氏が行った。未整理もあるので、この一覧表は全てではない）

| | 出土地 | 遺物名 | 岩 石 名 | 色 調 |
|---|-----|------|-----------|------|
| 1 | SD1 | 子持勾玉 | 滑 石 | 淡緑色 |
| 2 | 〃 | 勾 玉 | 〃 | 暗緑色 |
| 3 | 〃 | 双孔円板 | 〃 | 濃黄緑色 |
| 4 | 〃 | 延 石 | 砂 岩 | 茶灰 色 |
| 5 | 〃 | 〃 | 黒雲母閃紋岩 | 灰 黒色 |
| 6 | 〃 | 〃 | 片麻状黒雲母花崗岩 | 暗赤 色 |
| 7 | 〃 | 〃 | 黒雲母花崗岩 | 灰 色 |
| 8 | SX5 | 勾 玉 | 滑 石 | 濃緑色 |
| 9 | 〃 | 管 玉 | 〃 | 黄緑色 |

昭和58年3月31日◎

天理市前裁町九ノ坪・シマダ遺跡
発掘調査概報

発行 天理市
天理市川原城町605番地

編集 天理市教育委員会
天理市川原城町132番地

印刷 天理時報社
天理市稻葉町80番地